様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：６２５０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｈ００７４７

研究課題名（和文）官衙機構の動態からみた古代日本における境域の特質

研究課題名（英文）Research on the domination of the frontier(Boundary area/periphery) by ancient Japan and the uniqueness of those areas.

研究代表者
林部　均（HAYASHIBE, HITOSHI）

国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・教授

研究者番号：７０２５０３７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,000,000円

研究成果の概要（和文）：　古代日本は、その東(東北地方から北海道)と西(九州から奄美・沖縄)に境域が存在した。その統治のため、特別な官衙を設置した。国家の境域が地勢・政治・経済の上でも、本州中央とも異なる特別な地域と認識されていたからである。境域に設置された官衙は地域支配の拠点であるとともに、国家の外の世界との交渉・交流拠点であった。そのため、境域には、人・モノ・情報が集まり蓄積された。境域の官衙は、設置時期が本州中央より早く、かつ大規模な倉庫をもつものがあった。これが境域の官衙の独自性であり、境域の特徴でもあった。この独自性が古代日本を変革する源泉になったことを考古学の立場から明らかとした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
古代日本について、北からみた視点、南からみた視点での研究は、1990年以降、様々なかたちで取り組まれ、多くの研究成果をあげてきた。地域の歴史を重視することは重要であり、本州中央の国家からみた歴史観からの脱却ということでは大きな意味をもっていた。しかし、そのような北からの視点、南からの視点では、地域に重きを置いたがゆえに、本州中央からの影響への配慮が十分ではなかったのではないか。
本研究では、本州中央の古代国家、その東(北)と西(南)の境域を対等な立場で扱うことに特徴がある。日本史ではなく、列島史を意識して、列島のすべての地域を対等に比較する視点を提示したということが本研究の社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：Ancient Japan had frontiers(Boundary area/periphery) to east and west. To control the frontier, ancient Japan established special government offices. The frontier government offices were centers of control interaction with the world outside the nation. People, products, and intelligence were gathered and accumulated on the frontier. Frontier government offices were set up quickly and with large warehouses. From an archaeological standpoint, it is clear that this became a characteristic of the frontier and a source of change in ancient Japan.

研究分野：日本考古学

キーワード：古代国家　官衙機構　境界領域　列島史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

古代日本は、その境域である東(東北地方)と西(九州地方)に居住する人々を「蝦夷」「隼人」などと呼称し、特別な支配システムで統治した。国家の境域が、地勢・政治・経済の上でも、列島中央(本州中央)とは異なる特別な地域と認識されていたからである。そのため古代国家は城柵と呼ばれる特別な役所を設置した。

国家の境域をめぐる研究は、これまでも様々なかたちでおこなわれてきた。国家の境域は、外の世界と接するがゆえに、地勢的にも政治・経済的にも特別な地域と認識されてきた。古代においても、政治・経済的な機能(支配など)とともに、交渉・交流(外交・交易・軍事など)において重要な意味をもつ地域であった。また、境域で起こったことが、国家の歴史的展開に大きな影響を与えることもあった(ブールス・バートン『日本の「境界」』2000 年、村井章介『境界史の構想』2014 年)。国家の境界を単なる「周縁」「辺境」と捉えるのではなく、国家の外の領域と接する、きわめて重要な地域と捉えなおす必要があることは、現代の世界で起こる様々な紛争などをみても明らかであろう(A.C.ディナー『境界から世界を見る』2015 年)。

日本古代史においても、このような境域、すなわち東は東北地方北部から北海道、西は九州地方南部から琉球・奄美地域について、1990～2000 年代頃から考古学・日本史を中心として多くの研究が展開されてきた。多くの地域の歴史が明らかになるとともに、地域のもつ独自性、交流の実態が明らかとなった(入間田宣夫・小林真人・斉藤利男編『北の内海世界』1999 年、網野善彦・石井進編『北から見直す日本史』2001 年、天野哲也・臼杵勲・菊地俊彦編『北方世界の交流と変容』2006 年、ヨーゼフ・クライナー他編『古代末期・日本の境界』2010 年、池田榮史編『古代中世の境界領域』2008 年、菊池俊彦・中村和之編『中世の北東アジアとアイヌ』2008 年、天野哲也・池田榮史・臼杵勲編『中世東アジアの周縁世界』2009 年、榎森進・熊谷公男編『古代中世の蝦夷社会』2011 年、小口雅史編『海峡と古代蝦夷』2011 年、東北芸術工科大学東北文化研究センター編『北から生まれた中世日本』2012 年など)。

本研究も全面的にこのような動向や先行研究を踏まえて立案・実施した。しかし、これらの研究は、日本古代国家の境域の特徴や独自性は明らかにしたものの、それがどうして、国家の歴史的展開に影響を与えたのかまでは十分に明らかにしたとはいえない。とくに地域の歴史を重く見たことにより、国家の側からの視点が弱かった。地域のもつ特徴にあらわれる独自性などは、古代国家とのかかわりの中で形成されたとみるのが自然である。本研究が城柵をはじめとした官衙機構の動態に視点をおいた理由である。

２．研究の目的

本州中心にあった古代国家には、その東(東北地方)と西(九州地方)に支配の及ばない境域が存在した。それぞれに居住する人々を「蝦夷」「隼人」などと呼称し、特別な支配システムで統治した。国家の境域が、地勢・政治・経済の上でも、本州中央とは異なる特別な地域と認識されていたからである。そのため古代国家は、これらの地域に城柵と呼ばれる特別な役所を設置した。

日本歴史を通して見たとき、国家の政治形態を大きく変える変革には、いつも、この地域が深くかかわっている。どうして境域が国家の変革に大きくかかわることができたのか、この問題について、国家の外の地域と接するという、この地域のもつ特質、とくに交渉・交流(外交・交易・軍事)によってもたらされる人・モノ・情報と、その蓄積が深くかかわるという見通しのもと、その実態を明らかにして国家の境域という視点からの古代史像構築を試みる。

本研究では、国家の境域のもつ独自性、とくに交渉・交流(外交・交易・軍事)によってもたらされる人・モノ・情報に着目して、具体的には古代日本の地域支配拠点である官衙の発掘調査成果や出土遺物などを再検討し、その実態を明らかにする。これまでの官衙の検討では政治史的な視点からの研究が主としておこなわれてきた。境域の官衙について、国家の外の地域との交渉・交流(外交・交易・軍事)機能に着目した研究は少なかった。境域の官衙は、国家の外の地域の人々

との外交の場であり、交易の拠点であった。また、軍事的な緊張の最前線であった。人・モノ・情報がもたらされ蓄積された。そして、それらが国家の変革に境域が深くかかわる源泉となった。遺跡や遺構・遺物にその痕跡が残る可能性が高い。本研究ではそれらを分析することにより、古代日本の境域のもつ特質や、この地域が古代日本の歴史的展開に与えた影響を明らかにすることを目的とする。

そして、境域という視点から日本古代史像の再構築をおこなうとともに、さらに時代の枠組みを超えて現代社会の境域(たとえば国境など)、地域間格差、中央と地方との関係など、地域社会がもつ様々な問題に対して、歴史学の視点から研究する素材を提供することを目指す。

３．研究の方法

本研究では、古代国家の東(東北地方)と西(九州)、すなわち境域に設置された官衙の実態復元をおこない、本州中央と境域に設置された官衙を比較分析することにより、この地域におかれた官衙の独自な機能である交渉・交流(外交・交易・軍事)拠点としての特徴を明らかにする。そして、古代日本が、これらの地域をどのように認識し、また、支配のためにどのような特別な制度を構築しようとしたのかを検討する。官衙のもつ交渉・交流(外交・交易・軍事)拠点という視点から古代日本の境域の特徴を明らかにする。

(1)　境域の官衙の実態把握　　古代日本の境域における官衙の最新の発掘調査にもとづき、遺跡を構成する建物や空間の機能を可能な限り復元する。そのため本州中央の古代国家の王宮・王都にともなう中央官衙や、国府や郡家という地方官衙の発掘調査の成果、出土資料を調査する。
(2)　境域の官衙の特徴抽出　　境域の官衙の交渉・交流拠点という視点から官衙の建物配置・構造、空間利用、出土遺物から分析する。たとえば、外交であれば儀式のための空間として何が必要か(広場・石敷き・門など)、人や物資の交流・交易とその蓄積にかかわっては、具体的な遺構・出土遺物に特徴的なものは何か(倉庫・交通路・港湾など)、さらに軍事にかかわって必要なモノは何か(柵・櫓・大溝・武器・武具など)を分析し、人・モノ・情報が行きかい、それを蓄積する場である境域の官衙の特徴を明らかにする。
(3)　地域社会の中での官衙の役割　　境域の官衙が地域社会に果たした役割を明らかにするため、古代国家の支配システムを精神的な側面から支えた寺院や、官衙の周辺地域の集落を遺跡の動態、遺構・出土遺物の内容から具体的に分析し、仏教信仰の波及、国家による支配システムの浸透という側面から検討を加える。

そして、これらのことを総合して、古代日本の境域における支配システムの特徴や官衙の交渉・交流拠点としての実態、すなわち、この地域において、具体的に人・モノ・情報がどのように行きかい、そして蓄積されたのかを分析し、この地域がもつ本州中央とは異なる特質を明確にする。そして、境域が古代日本の歴史的展開に与えた影響を明らかにし、この地域が強い影響力をもつに至った源泉は何かを考えて古代日本の境域の意味を解明し、境域からみた日本古代史像を構築する。さらに、あらためて境域と呼ばれる地域が生まれる背景と、それが現代の境域(たとえば国境など)に展開していく過程を考える。

４．研究成果

(1)　本研究では、境域の官衙がもつ交渉・交流拠点としての機能に着目した。そこで、東北地方の城柵官衙遺跡や九州の大宰府跡、西海道諸国の国府関連遺跡の最新の発掘調査成果にもとづき、これらの地域のみに認められる特徴的な遺構の抽出を試み、交渉・交流拠点を反映した遺構の存在を検討した。

その結果、東北地方の城柵官衙遺跡では秋田城跡、九州の大宰府、西海道諸国の国府関連遺跡では大宰府のみに、大規模な倉庫群が存在することが判明した。多賀城跡、胆沢城跡、志波城跡等の城柵官衙遺跡では、大規模な倉庫群は確認されておらず、秋田城跡の特徴である。また、西海道諸国の国府関連遺跡でも倉庫群の確認はみられず、大宰府跡のもつ大きな特徴である。さらに本州中央の国府関連遺跡においても、大規模な倉庫群の確認はない(あくまで国レベルの官衙には倉庫群は確認されていないということであって、郡レベルの郡衙等においては正倉と呼ばれる倉庫群は各地で検出されている)。官衙遺跡の場合、政庁という中枢の調査のみが実施され、その周辺の調査が十分ではないことも考慮しなくてはならないが、秋田城跡、大宰府跡における大規模な倉庫群の存在は注目してよい。

秋田城跡は『続日本紀』によると天平５年(733)に設置されたもので、倉庫群は政庁の北西、外郭西門の内側(城内)、焼山地区に整然と配置される。8 世紀第２四半期から存在し、最も整備されるのが、8 世紀後半から 9 世紀前半である。

いっぽう大宰府跡は歴史書にその創建にかかわる記事はないが、政庁の発掘調査により政庁Ⅰ期新段階(7 世紀末～8 世紀初め)からを大宰府とみるのが妥当である。その政庁のすぐ西、四王寺山から張り出してきた丘陵上に位置する蔵司地区において倉庫群が確認されている。東西 9 間、南北２間で南と北に庇をもつ長大な建物(8 世紀前半)や、6 棟の倉庫群が中央の広場を囲んで「コ」の字形に配置されていた(8 世紀中ごろ～)。

秋田城は本州最北端の城柵であり、日本海を通した北方社会(東北地方北部から北海道)との交渉・交流のための拠点として設置されたといわれる。蝦夷と呼ばれた人々や北海道の擦文文化

を担った人々、オホーツク文化を担った人々が交流のために秋田城を訪れたと推定される。そういった人々との交流のための物資の管理・保管のために、倉庫群が設置された。
　大宰府は本州の古代国家の中で平城宮といった王宮に次ぐ規模の官衙である。大陸との交渉、西海道諸国を管轄していた。大陸からの使節への対応、西海道諸国からやってくる人々や、当時、南島と呼ばれていた奄美・沖縄地域の人々との交渉・交流の場であったと推定される。そういった人々との交流のためにも物資の管理・保管が必要であり、そのために巨大な建物や整然と配置された倉庫群がつくられた。
　さらに秋田城跡、大宰府跡ともに、倉庫群は政庁という官衙中枢に隣接して確認されている。これこそが倉庫群のもつ意味の重要性を視覚的に示すと考える。
　このように、境域の官衙を見渡したところ、本州の国府関連遺跡と共通の特徴(政庁等)を備えつつ、独自な特徴をもつことが明らかとなった。すべての境域の官衙でみられるわけではないが、この地域に置かれた官衙がもつ交渉・交流拠点としての特徴を端的に示すものとして注目される。

(2)　交渉・交流拠点としての秋田城跡に注目する中で、北方世界、すなわち北海道の擦文文化、オホーツク文化と古代国家との交流へと研究が展開した。
　秋田城が北方交流の拠点として整備された 8 世紀中ごろ以降、秋田城跡の周辺で秋田城に供給する目的で生産された須恵器が、北海道札幌市・江別市・恵庭市・千歳市といった石狩低地帯の遺跡から出土している。千歳市ユカンボシ C15 遺跡・美々8 遺跡・末広遺跡・丸子山遺跡、恵庭市中島松 6 遺跡・茂漁 4 遺跡、札幌市 C504 遺跡、江別市後藤遺跡等である。須恵器杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋が遺跡全体の中で１点、もしくは数点出土している。出土した須恵器の器種や量から食膳具としての利用は考えられないので、古代国家を象徴するモノとして石狩低地帯に持ち込まれた可能性が強い。この事実こそが、秋田城が北方世界との交渉・交流拠点であったことを証明する。そして、石狩低地帯に搬入される時期も秋田城跡焼山地区の倉庫群が整備される時期と対応しており、須恵器という具体的なモノ資料から秋田城跡の倉庫群がもった交渉・交流という機能を検証する。
　ところで 7 世紀後半、北海道の石狩低地帯では擦文文化が成立する。カマドをもった方形の竪穴住居や「北海道式古墳」の出現や土師器杯と甕で構成される新しい土器様式の成立は、それまでの続縄文文化を大きく変革するもので、その内的な展開からは解釈が困難であろう。東北地方北部からの影響を考える意見が強いが、このような変化は関東から東北地方といった東日本全体でおこっており(変化の内容は地域ごとで少しずつ違う)、擦文文化の成立も本州でおこった変化と一連のものとみなすのが自然であろう。東日本全体で起こった変化の背景には、本州中央での古代国家の成立とその地域支配の進展が考えられる。そこで擦文文化の成立についても、その背景に、古代国家の強い影響を想定するのが妥当である。これまでも、擦文文化の成立に古代国家とのかかわりを想定する意見はあった。しかし、地域の独自性を重く見る研究動向の中では、等閑視されてきた。地域の歴史を見る視点の重要性は言うまでもない。しかし、擦文文化を日本列島の歴史に正しく位置づけるためにも、本州の古代国家からの視点も対等に扱い、歴史像を描く必要があることを再認識した。
　さらに、北海道の擦文文化、オホーツク文化の遺跡から、本州から持ち込まれたと推定される銭貨、蕨手刀、銙帯金具、穀物、木製品などが出土している。とくに北海道根室市トーサムポロ竪穴群では、秋田城のそばの男鹿半島の須恵器窯で焼成された須恵器台付皿がオホーツク文化の土器と一緒に出土している。北海道斜里町のチャシコツ岬上遺跡というオホーツク文化の遺跡では、皇朝十二銭のひとつである神功開寳(765 年初鋳)が出土している。北海道網走市常呂貝塚や枝幸町目梨泊遺跡などでも、銙帯金具や蕨手刀がまとまって出土している。これらのオホーツク文化の遺跡から出土する本州系「モノ」資料は、通常、本州からまず擦文文化に渡り、そこからオホーツク文化にもたらされたと解釈されることが多い。しかし、秋田城の果たした役割の重要性を考えるとき、本州の秋田城から北海道の日本海側、宗谷海峡を経てオホーツク海という交流ルートの想定も可能であり、古代国家とオホーツク文化との相互交流の存在を考えたい。
　北海道南部の奥尻島の青苗砂丘遺跡で 7 世紀後半のオホーツク文化の遺跡が確認され、『日本書紀』斉明 4～6 年(658～660)の阿倍比羅夫が「北方遠征」にみられる「渡島蝦夷」と敵対した「粛慎」(アシハセ)にかかわる遺跡ではないかと推定されている。「粛慎」はオホーツク文化を担った人々といわれている。平安時代、都の貴族が珍重したオオワシの尾羽は、オホーツク海沿岸から北海道東部、千島列島でしか入手が困難であるので、オホーツク文化を介してしか入手できない。古代国家はオホーツク文化の存在を認識していたし、その相互交流があったとみるのが妥当ではないか。
　ただ、北海道に持ち込まれた本州系「モノ」資料の分析はいまだ不十分である。漠然とした搬入の傾向が明らかとなっているだけで、そこから歴史的な解釈を導き出すには至っていない。様々な分析視点が残されている。さらに北海道は近世に至るまで文字による記録は少ない。そこで、遺跡の年代研究をおこなうにあたっても炭素 14 年代などを使うことが多い。しかし、その年代幅は大きく年代研究の精度としては低いといわざるを得ない。擦文文化、オホーツク文化においても精緻な土器編年がなされているにもかかわらず、それに暦年代を与えることは困難をきわめる。50 年～100 年単位での大まかな年代論が精いっぱいである。これでは、なかなか本州系「モノ」資料の分析と評価の精緻化も望めない。さらにオホーツク文化、擦文文化を隣接する

地域、たとえば本州の古代国家や大陸の文化との比較研究も対等におこなうことができない。年代研究の精緻化が望まれる。

(3)　本研究では、古代国家の東と西にある境域に設置された官衙遺跡を調査した。東は主に東北地方の城柵官衙遺跡、西は大宰府と西海道諸国の官衙遺跡である。そして、外の世界と接する境界にあたる地域では、かなり早い段階から国府などの施設が造営されていることが明らかとなった。東の陸奥国では、7 世紀後半～末に宮城県仙台市郡山遺跡Ⅱ期官衙が多賀城に先行する陸奥国府として造営される。西では宮崎県西都市日向国府跡が 7 世紀後半～末に成立する。ともに国府としては本州の古代国家全体を見渡しても古い例となる。ともに正殿があって庭をはさんで脇殿が建つという定型化した国府とは異なり、それぞれ独自な形態をする。古代国家は地域支配を進めるにあたり、全国を画一的に支配するのではなく、東と西の境域を最初に確保し、地域支配を進めた。境域をいかに重視したのかがよくわかる。境域におかれた官衙の特徴があらわれている。このことは都で使われた特別な土師器(畿内産土師器)が各地域に持ち込まれる様相とも一致する。都の土師器は、都を中心に同心円状に分布をひろげるのではなく、国家の境界など拠点となる地域に早い段階(飛鳥Ⅱ・Ⅲ)から集中して搬入される。郡山遺跡、日向国府跡ともに飛鳥Ⅲ(7 世紀後半)に位置づけられる土師器杯が出土している。古代国家とこの地域が何らかの交渉をもち、そして国家の出先機関である国府が成立したとみてよい。古代国家がいかにこの地域を重要視していたのかがわかる。

(4)　本研究では、境域の官衙のもつ特徴のいくつかは明らかにし得た。最後に国家の境界や境域の特徴を整理しておきたい。

現代の国家のように境界(国境)が明確になるのは近代以降である。それまで国家の境界には、領域をもったグレーゾーンともいうべき空間が存在した。境界領域、境域、そして周縁、辺境と呼ばれた。そして、この領域は固定的なものではなく、時代により変化するものであった。このことを古代国家の西、九州南部から奄美、沖縄地域でみてみたい(高梨修「境界の歴史に育まれた奄美」『博物館が語る奄美の自然・歴史・文化』2021 年)。

7 世紀後半、宮崎県西都市に日向国府が造営される。古代国家にとって最も西の支配拠点である。ただ、これは官衙としての国府の成立であり、制度としての日向国の成立はさらに遡る。この時の日向国の支配範囲は、日向国より南の薩摩半島(後の薩摩国)、大隅半島(後の大隅国)をも含みこんだものであった。まさに広域日向国であった。支配領域が広いのも境域におかれた官衙の特徴であり、古代国家の東の境域にあたる陸奥国・越国(出羽国)の様相とも一致する。7 世紀後半、日向国が境域であった。

このような広域日向国から大宝 2 年(702)に薩摩国(唱更国)、和銅 6 年(713)に大隅国が分国する。さらに国に準ずる扱いとして多禰嶋が成立する。それぞれ財政的な基盤は脆弱で大宰府をはじめとした九州北部の国々が支えた。平安時代になると多禰嶋は廃止されるが、南方の赤木・檳榔・夜光貝等が交流された。それを検証する遺跡が奄美大島の奄美市小湊フワガネク遺跡、土盛マツノト遺跡などの「ヤコウガイ大量出土遺跡」である。また、喜界島においても城久遺跡群がみつかっている。城久遺跡群をどのように評価するかについては諸説あるが、その出土遺物などから、本州にあった国家とのかかわりを考えるのが適当であろう。境域は奈良時代には大隅諸島、平安時代には奄美群島とその位置を変えていた。

また、奄美群島は中世になり、沖縄本島で琉球王国が成立するとその支配領域に組み込まれる。本州の国家からみたとき、境域はただ広がるばかりではなく、その外の世界とのかかわりで狭まることもあった。古代から中世にかけての奄美群島の考古学には、そのような境域の特質が反映されている可能性がある。

さらに、江戸時代はじめの薩摩藩による琉球王国への軍事進攻によって、奄美群島は薩摩藩の支配を受けることになり、明治にそのまま鹿児島県に組み込まれる。太平洋戦争後は沖縄県とともにアメリカの軍事支配を受けるが、昭和 28 年(1953)に沖縄県に先行して日本に復帰する。奄美群島ほど、国家の境界が北から、南から移動した地域はないであろう。前近代においては、境界は領域をもったグレーゾーンであった。奄美群島はそのことを端的に示すともに、近代の国境が生まれて以降も、その境界が移動することを経験した稀有の地域である。古代から近世、近・現代の本州を中心とした国家、そして、沖縄本島を中心とした琉球王国も含めて、この地域の特質を考えることは、古代国家の境域を考えるうえでも重要な観点になると考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計44件（うち査読付論文　14件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 林部　均	４．巻 －
２．論文標題 飛鳥宮跡と苑池	５．発行年 2020年
３．雑誌名 飛鳥の王宮と苑池	６．最初と最後の頁 18-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 林部　均	４．巻 －
２．論文標題 多賀城と大宰府	５．発行年 2020年
３．雑誌名 大宰府と多賀城	６．最初と最後の頁 38-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 林部　均	４．巻 －
２．論文標題 多賀城・大宰府の成立過程からみた古代国家の地域支配	５．発行年 2021年
３．雑誌名 律令国家と大宰府史跡	６．最初と最後の頁 42-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 林部　均	４．巻 2号
２．論文標題 多賀城・大宰府の成立と古代国家	５．発行年 2021年
３．雑誌名 九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集	６．最初と最後の頁 195-202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 林部　均	4．巻 －
2．論文標題 飛鳥宮跡とその周辺	5．発行年 2021年
3．雑誌名 古代日本対外交流史事典	6．最初と最後の頁 110-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 林部　均	4．巻 －
2．論文標題 東アジアの都城制	5．発行年 2021年
3．雑誌名 古代日本対外交流史事典	6．最初と最後の頁 274-285
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 坂上康俊	4．巻 129編5号
2．論文標題 回顧と展望　日本古代・総説	5．発行年 2020年
3．雑誌名 史学雑誌	6．最初と最後の頁 37-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 坂上康俊	4．巻 186号
2．論文標題 九～十〇世紀の人口動態についての覚書	5．発行年 2020年
3．雑誌名 九州史学	6．最初と最後の頁 42-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 坂上康俊	4．巻 －
2．論文標題 令制大宰府成立前史－総領と大宰－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 律令国家と大宰府史跡	6．最初と最後の頁 2-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 坂上康俊	4．巻 232集
2．論文標題 福岡市域における8～9世紀集落の変貌とその背景	5．発行年 2022年
3．雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6．最初と最後の頁 59-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 蓑島栄紀	4．巻 1013
2．論文標題 アイヌ史研究の現在－交流史といくつかの論点－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 歴史学研究	6．最初と最後の頁 18-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 蓑島栄紀	4．巻 －
2．論文標題 古代から中世　和人との関係でみるアイヌ史	5．発行年 2020年
3．雑誌名 別冊太陽　アイヌをもっと知る図鑑　歴史を知り、未来へつなぐ	6．最初と最後の頁 30-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 蓑島栄紀	４．巻 －
２．論文標題 チャシの起源をさかのぼらせた厚真川流域の遺跡群	５．発行年 2020年
３．雑誌名 別冊太陽　アイヌをもっと知る図鑑　歴史を知り、未来へつなぐ	６．最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 蓑島栄紀	４．巻 －
２．論文標題 北方史	５．発行年 2021年
３．雑誌名 古代日本対外交流史事典	６．最初と最後の頁 240-246
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 三上喜孝	４．巻 24
２．論文標題 日本出土の古代木簡－古代地域社会における農業経営と仏教活動－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 木簡と文字	６．最初と最後の頁 347-356
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 三上喜孝	４．巻 221
２．論文標題 韓国出土木簡にみる海産物とその加工	５．発行年 2020年
３．雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	６．最初と最後の頁 123-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三上喜孝	4．巻 創刊号
2．論文標題 平泉出土文字資料へのアプローチ(1)　饗宴と文字	5．発行年 2021年
3．雑誌名 平泉学研究年報	6．最初と最後の頁 48-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三上喜孝	4．巻 26
2．論文標題 日本出土の古代木簡－戸籍と木簡－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 木簡と文字	6．最初と最後の頁 327-334
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三上喜孝	4．巻 16
2．論文標題 古代日本における人面墨書土器と祭祀	5．発行年 2021年
3．雑誌名 東西人文	6．最初と最後の頁 301-315
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三上喜孝	4．巻 －
2．論文標題 東アジアの木簡	5．発行年 2021年
3．雑誌名 古代日本対外交流史事典	6．最初と最後の頁 105-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三上喜孝	4．巻 17
2．論文標題 韓日木簡からみた古代東アジアの医薬文化	5．発行年 2021年
3．雑誌名 東西人文	6．最初と最後の頁 177-195
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三上喜孝	4．巻 －
2．論文標題 漢字文化の東アジア的展開と列島世界	5．発行年 2022年
3．雑誌名 地域の古代　東アジアと日本	6．最初と最後の頁 169-205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三上喜孝	4．巻 232
2．論文標題 出土文字資料から見た払田柵の機能	5．発行年 2022年
3．雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6．最初と最後の頁 277-286
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三上喜孝	4．巻 2
2．論文標題 出土文字資料の集成的研究　平泉出土文字資料へのアプローチ(2)	5．発行年 2022年
3．雑誌名 平泉学研究年報	6．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 蓑島栄紀	4．巻 232
2．論文標題 古代北方交流史における秋田城の機能と意義の再検討	5．発行年 2022年
3．雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6．最初と最後の頁 113-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鈴木琢也	4．巻 116
2．論文標題 擦文文化と奥州藤原氏－北日本中世初期の交流史－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Arctic Circle	6．最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鈴木琢也	4．巻 7
2．論文標題 平泉無量光院跡出土の擦文土器－擦文文化集団と平泉の集団の交流についての予察	5．発行年 2022年
3．雑誌名 北海道博物館研究紀要	6．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 桒畑光博	4．巻 30
2．論文標題 郡元西原遺跡の大溝埋土内検出テフラの検討－霧島御鉢宮杉テフラの年代推定のための一資料	5．発行年 2020年
3．雑誌名 宮崎考古	6．最初と最後の頁 45-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 桒畑光博	4．巻 －
2．論文標題 島津荘の成立から拡大期における遺跡の様相－都城盆地を中心として－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 岩永省三先生退職記念論文集　持続する志	6．最初と最後の頁 487-506
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 桒畑光博	4．巻 232
2．論文標題 都城盆地における8世紀後半から10世紀の集落動態とその背景	5．発行年 2022年
3．雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6．最初と最後の頁 179-219
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 林部　均	4．巻 -
2．論文標題 北の境界領域からみた日本史	5．発行年 2019年
3．雑誌名 令和元年度後三年合戦沼柵公開講座　資料集	6．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 林部　均	4．巻 -
2．論文標題 古代国家の形成と王宮・王都－飛鳥の王宮・王都から平城京へ－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 斎宮歴史博物館公開講座「飛鳥の宮と斎の宮」資料集	6．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 三上喜孝	４．巻 22
２．論文標題 日本出土の古代文字資料－秋田県秋田城跡１１１次調査出土具注暦記載漆紙文書－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 木簡と文字	６．最初と最後の頁 361-371
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 簑島栄紀	４．巻 233
２．論文標題 「刀伊襲来」事件と東アジア	５．発行年 2019年
３．雑誌名 アジア遊学	６．最初と最後の頁 47-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 簑島栄紀	４．巻 87
２．論文標題 従北海道胆振地方厚真町的発掘成果所見古代～近世愛努史	５．発行年 2019年
３．雑誌名 原教界	６．最初と最後の頁 86-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 簑島栄紀	４．巻 -
２．論文標題 文献史料からみたオホーツク文化をめぐる交流	５．発行年 2019年
３．雑誌名 チャシコツ岬上遺跡国史跡化記念シンポジウム　オホーツク文化と古代日本　予稿集	６．最初と最後の頁 19-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鈴木琢也	4．巻 -
2．論文標題 北海道島における本州産須恵器の流通－5世紀～11世紀－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東洋陶磁学会第74回大会研究発表要旨配布資料	6．最初と最後の頁 9-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 林部　均	4．巻 -
2．論文標題 多賀城と大宰府	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ここが変わる！日本の考古学	6．最初と最後の頁 138-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 坂上康俊	4．巻 156
2．論文標題 大宝二年筑前国嶋郡川辺里戸籍の故地	5．発行年 2018年
3．雑誌名 史淵	6．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 坂上康俊	4．巻 -
2．論文標題 筑紫館の風景	5．発行年 2018年
3．雑誌名 史料・史跡と古代社会	6．最初と最後の頁 248-269
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三上喜孝	4．巻 930
2．論文標題 大宰府と多賀城―古代国家のフロンティア―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 学士会報	6．最初と最後の頁 94-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三上喜孝	4．巻 -
2．論文標題 払田柵第151次調査出土第7号漆紙文書の再釈読	5．発行年 2019年
3．雑誌名 払田柵跡　年報2018	6．最初と最後の頁 47-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三上喜孝	4．巻 -
2．論文標題 秋田城跡第111次調査出土39号漆紙文書	5．発行年 2019年
3．雑誌名 秋田城跡　年報2018	6．最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 蓑島栄紀	4．巻 5
2．論文標題 9～11・12世紀における北方世界の交流	5．発行年 2018年
3．雑誌名 古代東ユーラシア研究センター年報	6．最初と最後の頁 121-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計32件（うち招待講演　9件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 蓑島栄紀
2．発表標題 「アイヌ文化期」概念の過去・未来－アイヌ史の(再)構築のために－
3．学会等名 第4回学知史研究会
4．発表年 2021年

1．発表者名 蓑島栄紀
2．発表標題 歴史学からみたオホーツク文化とその周辺
3．学会等名 目梨泊遺跡出土金銅装直刀の技法材料および歴史的背景に関する研究会(2)
4．発表年 2021年

1．発表者名 蓑島栄紀
2．発表標題 アイヌ民族史の時代区分をめぐって－先行学説と今日の課題
3．学会等名 令和2年度アイヌ文化財等専門職員研修会
4．発表年 2021年

1．発表者名 蓑島栄紀
2．発表標題 『アイヌ文化期』概念をめぐる研究史的検討
3．学会等名 北海道大学アイヌ・先住民研究センター2021年度公開講座
4．発表年 2021年

１．発表者名 三上喜孝
２．発表標題 日韓の木簡からみた古代東アジアの医薬文化
３．学会等名 古代東アジア文字資料研究の現在と未来
４．発表年 2020年

１．発表者名 三上喜孝
２．発表標題 平泉出土文字資料へのアプローチ(1)　饗宴と文字
３．学会等名 平泉学研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 三上喜孝
２．発表標題 観音信仰　百済から日本へ　『観世音応験記』を出発点として
３．学会等名 日韓古代比較宗教史国際シンポジウム
４．発表年 2021年

１．発表者名 三上喜孝
２．発表標題 古代日本における人面墨書土器と祭祀
３．学会等名 第3回国際学術大会「慶山　所月里木簡の綜合的検討
４．発表年 2021年

１．発表者名 三上喜孝
２．発表標題 出土文字資料集成研究
３．学会等名 平泉学研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 鈴木琢也
２．発表標題 本州産製品の流通からみた擦文文化・オホーツク文化の交流
３．学会等名 目梨泊遺跡出土金銅装直刀の技法材料および歴史的背景に関する研究会(2)
４．発表年 2021年

１．発表者名 鈴木琢也
２．発表標題 北方四島の遺跡と擦文文化
３．学会等名 第7回　カリンバ講演会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 桒畑光博
２．発表標題 火山と人間－南九州のエピソードを中心にして－
３．学会等名 霧島ジオパークガイド養成講座
４．発表年 2021年

１．発表者名 林部　均
２．発表標題 古代国家形成と王宮・王都－飛鳥の王宮・王都から平城京へ－
３．学会等名 斎宮歴史博物館　公開講座（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 林部　均
２．発表標題 北の境界領域からみた日本史
３．学会等名 横手市教育委員会「後三年合戦沼柵公開講座」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 林部　均
２．発表標題 古代国家と列島世界
３．学会等名 国立歴史民俗博物館「歴博講演会」
４．発表年 2020年

１．発表者名 三上喜孝
２．発表標題 出羽国と古代仏教－列島周縁に広がる古代仏教を考えるー
３．学会等名 秋田市秋田城跡歴史資料館　企画展「秋田城と古代仏教」講演会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 三上喜孝
２．発表標題 『観世音応験記』の周辺－日本古代における観音信仰の受容をめぐって－
３．学会等名 仙台古代史談話会・東北大学文学部
４．発表年 2019年

１．発表者名 簑島栄紀
２．発表標題 文献史料からみたオホーツク文化をめぐる交流
３．学会等名 チャシコツ岬上遺跡国史跡化記念シンポジウム「オホーツク文化と古代日本」
４．発表年 2019年

１．発表者名 簑島栄紀
２．発表標題 アイヌ史の枠組みと流れ
３．学会等名 アイヌ・先住民研究センター・月例公開講座
４．発表年 2019年

１．発表者名 簑島栄紀
２．発表標題 アイヌ・先住民を学ぶ
３．学会等名 北海道大学　W103
４．発表年 2019年

１．発表者名 簑島栄紀
２．発表標題 アイヌ史の枠組みと交易
３．学会等名 令和元年度学校教育におけるアイヌ文化に関する講習会
４．発表年 2019年

１．発表者名 鈴木琢也
２．発表標題 北海道島における本州産須恵器の流通－5世紀～11世紀－
３．学会等名 東洋陶磁学会第47回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 坂上康俊
２．発表標題 本岡G6号墳の被葬者像をめぐって
３．学会等名 庚寅年銘大刀の謎にせまる
４．発表年 2019年

１．発表者名 坂上康俊
２．発表標題 古代末期福岡平野における集落の変貌
３．学会等名 2019年度九州史学研究会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 坂上康俊
２．発表標題 中国文明と日本律令制
３．学会等名 2019年度史学会大会日本史部会
４．発表年 2019年

１．発表者名 坂上康俊
２．発表標題 大宝二年筑前国嶋郡川辺里戸籍をめぐる諸問題
３．学会等名 九州史学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 三上喜孝
２．発表標題 古代国家の分国・移民政策と南奥―石城・石背建国1300年に寄せて―
３．学会等名 福島県考古学会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 三上喜孝
２．発表標題 出土文字から読み解く払田柵跡と秋田の古代
３．学会等名 秋田県埋蔵文化財センター
４．発表年 2018年

１．発表者名 蓑島栄紀
２．発表標題 アイヌ史における古代
３．学会等名 アイヌ民族財団（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 蓑島栄紀
２．発表標題 9～11・12世紀における北方世界の交流
３．学会等名 専修大学古代東ユーラシア研究センター（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 蓑島栄紀
２．発表標題 アジアのなかの古代東北・北海道―続縄文文化をめぐる倭国と北東アジア
３．学会等名 滝沢市埋蔵文化財センター（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 蓑島栄紀
２．発表標題 古代の日本・アジアと北海道産コンブ
３．学会等名 利尻学講座（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

1．著者名 高田貫太	4．発行年 2019年
2．出版社 KADOKAWA	5．総ページ数 286
3．書名 ｛異形」の古墳－朝鮮半島の前方後円墳－	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	三上　喜孝 (MIKAMI YOSHITAKA) (10331290)	国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・教授 (62501)	
研究分担者	菱田　哲郎 (HISHIDA TETURO) (20183577)	京都府立大学・文学部・教授 (24302)	
研究分担者	坂上　康俊 (SAKAUE YASUTOSHI) (30162275)	九州大学・人文科学研究院・教授 (17102)	
研究分担者	鈴木　琢也 (SZUKI TAKUYA) (40342729)	北海道博物館・研究部・学芸員 (80101)	
研究分担者	高田　貫太 (TAKATA KANTA) (60379815)	国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・准教授 (62501)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	蓑島　栄紀 (MINOSHIMA HIDEKI) (70337103)	北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・准教授 (10101)	
研究分担者	桑畑　光博 (KUWAHATA MITUHIRO) (70748144)	九州大学・アジア埋蔵文化財研究センター・学術研究者 (17102)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関